

第 71 回山口西田読書会(2015 年 4 月 18 日)

前回(2015 年 4 月 11 日)のprotocols(担当：竹本)

参加者：佐野先生 他 12 名

### 1.佐野先生protocolsについて

判断以前の「純粹經驗」は「アリノママの自分」あるいは「真の自己」と言えるか

→西田先生は真の自己が存在すると考えている。西田先生によれば目的観念より深い動機が衝動であり、衝動は最も深き我々の意志の要因である。そうしてそれは「直接經驗の事実」である。

例えば

水を飲むのはなぜか？→生きるためだ→では、なぜ渇きがあるのか？→分からない

恋をするのはなぜか？→子孫を残すためだ→では、なぜ恋によって苦しむのか？  
→分からない

このように「生きるため」ということも「子孫を残すため」ということも後付けに過ぎない。このような目的観念は「希望」と呼ばれ、それを抱く主観的理性は「偽我」である。これに対し神性的理性が真の自己(純粹經驗説では**実在の統一力**)である。この理性も衝動であり、もっとも深いところから出ている。すなわちどこまでも深く分からないものである。

### 2.前回の議論要約

「精神の統一者である…」(II 9-5)から「…最も偉大なる者である」(II 9-6)まで読み進められ、議論は大きく次の 3 点に分かれた。

#### (1)理性について

#### (2)II 9-5 の注釈について

#### (3)純粹經驗について

まず、理性が取り上げられ、絶対的善が理性の満足であることが確認された。また、「物は統一に由りて成立するのである。観念感情も、これをして具体的実在たらしむるのは統一的自己の力によるのである」(II 9-5)とあり、画家の描いた絵の中のたった一本の草さえもそれが絵を構成している一要素だという点において統一力が認められ、宇宙を包括する理性を表すことが示された。

次に II 9-5 の注釈が何を意味しているのかが議論の対象となった。ここでは「ただ、実在の統一が内に働く時において、我々は自己の理想の如く実在を支配し、自己が自由の活動をなしつつあると感ずるのである」(II 9-5)の「感ずる」という箇所が感情ではないことを表すためであること、また「統一力即ち自己は何処より来るかというに、つまり実在統一力の発現であって、即ち永久不変の力である」(II 9-5)の「永久不変の力」が抽象的概念で

はなく、意志活動であることを示すためという結論に至った。

最後に議論は純粹経験に移った。2つの問いに対し、回答が出された。

問い：純粹経験の段階において、日本は「人の心で詩を書く」と言うが、西洋では「神の啓示によって詩を書く」と言う。この場合の「人の心」と「神の啓示」は同じことを指しているのか、それとも違うことを指しているのか？

回答：同じことである。文化の違いによって、人や神と表されているだけである。

問い：孫の運動会を夢中で見るのと、無我夢中で殺人をすることは純粹経験の段階では同じか？

回答：同じである。

理由：判断が下されていない段階のため、行為の結果は問題にならない。

行為の結果が善でも悪でも、それは人間の概念に過ぎない。絶対的悪は否定される。

(注)西田先生は「純粹経験の段階で悪事をなすことはない」と断言している。議論においては、「同じである」という回答がほとんどだったが、煩惱を超えた至誠の段階において悪事をなすことはないのかもしれない。

以上 3つの点の他に「ただ、実在の統一が内に働く時において、我々は自己の理想の如く実在を支配し、自己が自由の活動をなしつつあると感ずるのである」(II 9-5)から、「支配している、また感ずるのは誰か？」という問いが提示されたが、はっきりとした答えは出なかった。

### 3. 哲学的問い

パスカルは「空間的に見れば、宇宙はわたしを一点のように包みこみ、呑みこんでしまう。思考によって、わたしは宇宙を包みこむ」と述べた。この場合の「思考」は西田先生の言うような「宇宙を包括する**理性**」を指しているのだろうか、それとも**悟性**を指しているのだろうか？

(注)「包みこむ」(comprendre)という動詞には「理解する」という意味もある。

→パスカルのテキストを持ってこなかったため、議論の対象にならず。

(各人が好きなように論ずることができるため)